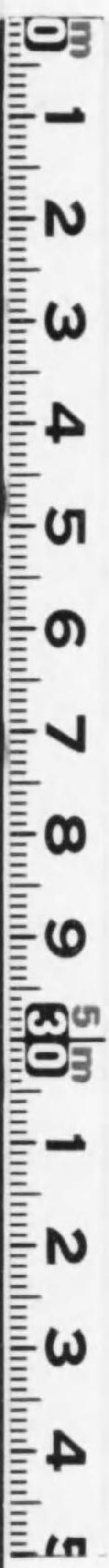


特260

764

清經

昭和改訂版
内二



始



特260
764

清經

(梗概) 平家の一門西海にて亡びし中にも、左中將清經は壽永二年の春
 月、月朗かな夜、豊前國柳が浦にて海に入りて失せぬ。粟津の三郎と
 いふ者、船中に有りし形見の鬢の髪を持ちて密に都に上り、清經の妻
 を訪ねて最後の状を語りぬ、妻は歎き悲みて夢にも逢ふことやあると
 まどろみしに、清經うつこの姿を現しければ、一人先立ちて身を空し
 くせしを恨み歎きしに、清經も、送りし形見を手向返すは情なきと、
 互は恨を速く後清經は西海に於ける平氏の運命の次第を語り、我が
 最後の状を審らかみ見せ、修羅道の苦患も、やがて佛果を得て成佛
 すべりと夢中に消へ去りし平家武將の物語なり。



シテ 左中将清経の靈
 ツレ 清経の妻
 ワキ 栗津三郎
 所 京都
 季 秋

清経

^注 ^舟 ^{わき} ^上 ^禾 八重乃塩浜の浦北波八重の塩浜北浦
 浪九重にいざや海もむ 是は左中将

清経の清肉はは中栗津の三重と申
 若よては相も頼まりは清経は終よ清
 身の成行へま事をも思念定らまけるか

あまのこけ國柳が浦の沖よりして、流身を
投定ぬ成程ひてゆく、そは後船中を思ま
れ、肌のはちりりに髪をの髪を、跡一思
ましく、い程お首をさき、流身を指、只今
都へ上りゆく、おやけ程ハ都乃住居よさ
ましく、て、たましく、ゆる右郷も

首乃まきに引いて、歩今ハ揚うた秋等て
早時ある、旅衣志ある、神の牙、此果
を思ひ、く、よ、お、お、お、お、お、お、
強よ、是のま、都よ、ま、て、ゆ、先、と、業、肉、を
中、さ、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、
た、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、

合戦も討まひ給ふべし 合戦も討
れ給ふべし 道世もさくふ 何とて 画圖もさ
さいと申ぞ はん 権勢は言ひし給
ふぞ 船に連も 油ぬる 芝乃 雜兵此手
ふからむ ぶりいとも 合戦定ら ませ ちほの

豊前此國柳が浦の沖ふして 更行月

の 船もよる 舟を投を 成めひて
何身を投室く 來給ひ ともや 恨
め かせめて 討まひ 又をまふ 乃
床此 徳と 情をま 力を 一をさふ だふ
家と 身を 投給ひ ぬま ばとも 一 誓うで
同 一 廿ふ 抱つ ちあふ とい ぬのめ おた 一

さの葉も今も今も早に腐り成る娘め
ささや美娘も其のうらみのあはれ
とささやうらみかたれ 何事もはり
あうまける世のあはれ 上は下り
つむ我宿のくへ 垣石の蔭吹風れ
あうまもささやあはれ 今も今も

身なれた今も誰をり憐のあめ乃月れよ
たを何り思をも 郎公名をもかくさ
て 清き身を投給ひて

後船中をいんまれば肌ハダの清きつよトシ髪カミの
髪を残り思まてい程よ 是も持てまの
てい 是は申將殿の思髪やこれだ

目もくれんまえ程も思ひの増るぞや
見るなよむづーのかみをまむづさ
よぢかへまもむれれと 月下
夜終 涙とまに思ひ寐の 夢よなりを
見へ給こと 福くきぬよかふくは枝や恋
をささるはまゝん 中吟
サシ 聖人よ夢さし

誰あひて現とみる かん 腹 裏 産
三男をさるく 志ん 頭 事みーて
生寛ー 愛やうーとんー世も幻は
らーと思ふまもまむりき取あるあま水
の 行もゆるも 濁浮れ古らみ たるん
空慕さよ 木下
た 嫁よ恋ー 人あひん

中吟
てーよま 爰てふ物にたのこそあへま

詞
いふ古し人何とてはらうに給ふぞ清鐘

しそはしとまてらへ 木もーぎんをなほや

らむ枕よふいぬふい愛清鐘をてはら

せをいふーをを授ゆるうらぬあへてら

うらぬるべまぞいふーあぬあつた清鐘安あ

見へ給ふぞあ難き去那のう命をほ

たてあをいぬを授させ給ふは事ら飾り

あつけるあにむれは唯根あーううそい

へたあは人あもものたまらう 我も根ハ

あああのみいあかいああーあをいばあ

はあー給あへん ちまもや飛んを

思ひ解りしをの葉を見
度よ心づくるのみをれば
ぞとすもと此社にと一度する思
乃ありいともむき道ぞり
心ゆきあやふめとの形んなれ
これ思ひのれき髪
かておくり

甲斐文もあく形んをなはは方乃恨

我の控ふし命此恨 ばふりあち

うしたる 道ぞつき 果髪乃

恨をさへいひ流て 祢る涙の手

松をさへてふりりあはれど恨

むきハ結露のふりたるぞ出

家形見しそ中ころうれ是なくお
忘る事もあんと思ふもぬるは
泣くは上は招をききし西海
田海の合戦乃物語中いんおも一門
を九別山家此城へも款向ふと笑へ
く取物もあは言濃おふた系

上弓
お終柳といふ所は流く
名を得る浦は是末此柳陰いとか
里そめの白屋を定む
八幡子清系詣りて
め奉り神馬七足そ外金銀種こ乃
持拍別奉幣の為成べし
世中此

うさふに神もなき物成何事も有りむ
心づくしに 上^ろう換ふ^ろへり^ろる^ろ新^ろ中^ろ
納言もあはれ 同上^ろ ち^ろも^ろも^ろと^ろ思^ろふ^ろす^ろ
ろも出れきるも 弱り果ぬる秋の苦る^ろを
和^ろて^ろ下^ろに^ろり^ろ 月^ろに^ろり^ろ 佛^ろ神^ろに^ろ密^ろも^ろ 控^ろ果^ろ結^ろふ^ろと^ろ心^ろほ
控^ろて^ろ一^ろ門^ろの^ろ氣^ろを^ろ失^ろひ^ろ力^ろを^ろ落^ろし^ろと^ろ
ヤア

足弱車のまごくと 氣を奪ふ^ろ一^ろなる^ろ
衣なりし有換 曲^ろ下^ろに^ろり^ろなる^ろ所^ろ子^ろ
長門の國へも 敵向ふと 夢^ろ一^ろく^ろ又^ろ船^ろ
子^ろを^ろ奪^ろし^ろし^ろづ^ろく^ろた^ろる^ろく^ろ押^ろ出^ろに^ろ心^ろの内^ろ
ぞと衣なる 實^ろや^ろ世^ろ中^ろの^ろ換^ろる^ろ愛^ろ了^ろそ^ろ誠^ろ
た^ろま^ろき^ろ保^ろえ^ろの^ろま^ろを^ろ来^ろの^ろ水^ろ乃^ろ秋^ろの^ろ紅^ろ
ヤア

葉とて散るよ来浮ふ葉の母をれ
や柳が浦乃秋風の追手ぐ布ある時
此波白鷺の群居る松をば源氏の旗
をなむひりま多勢かりと肝をりまて
清鐘いんよ落て思ふ振去よても八幡の
清滝宣あつたよ心魂ふ残る理り識

正世のかりよ宿り残ふかと只一筋よ
あぢきまやととも消えき
お涙の身を粒おきりあよ洋の波よさ
昔をき舟よ漕ひこつとさり夏を
水香乃沈と果んと思ひ切人よわい
まで若代のまつことありや曉乃月ふ

うそむくけしきにて母の庵らよま
あぐり腰よまやうてふ抜出しきも
きみやうに吹唱し今振を視ひ朗詠
越方乃末をわがこそ終よひらり
あご波のゆぬいぢへとゆぬいぢつし
よはせとても旅ぞりーあし思ひみさ

まやと余亦目みひふる物礼と人
な見るらんよ一人も何をみるめを
かま乃敷れを病よ傾く月をこれぞ
いぎや家もつまんと南無阿弥陀佛
弥陀佛連こせ給こととあうを空
初めく母よ里かつたをとあぢの底乃

澤と沈より真交の果ぞ也一也
つ巻上
少ふ心も呉服も浮ねも沈むも心の
海のうらめしかりたる繋りりく那
引くもくく奈落も回しうたりと乃
と夜は誰も解しきまらるる板橋は
よおちよおちれ一たつぎに歌るを矣

きた月かせいぬ山をての志をり雲乃
旗手をつろく將場はぬを拵へ那
見の眼乃光り是歌楽志癒痛患
乃場兵助も法性も知る歌赤ら
浪も沙是とかなきを誠も言後乃
十念丸きぬ法法のみよ頼り一修ふ

372
309

疑二ひも一形く突もんハ清經が實も
心も清經が仏果を得して慧有難
きま

昭和十二年三月廿五日印刷
昭和十二年三月三十日發行

定價金五拾錢

著作權所有



東京市下谷區上野櫻木町四十八番地
著作者 寶生 新

發行兼印刷者 江島伊兵衛

發行所 下掛寶生流談本刊行會

終

